

伏見作事板の廻漕と軍役（一）

中 川 和 明

はじめに

天正十九年正月十七日、知行宛行状及び豊臣氏蔵入地代官任命状が、秋田実季に発給された。これによって、秋田氏の領地の三分の一が、豊臣氏蔵入地とされ、秋田氏がその代官となった。この蔵入地は、山口啓二氏の「蔵入地の諸類型」によれば、「外様大名領内設置型」にあたる。そして、特に、この秋田領内に設置された蔵入地は、秋田杉の廻漕を第一の目的として、設置されたのである。

ところで、文禄四年から慶長四年までの、伏見作事板の割付・廻漕に関して、これまで、「海運」・「林業」・「商品流通」など、様々な観点から、優れた研究がなされてきた。しかし、「伏見作事板の割付・廻漕に関する基本的な歴史事実」の解明が、不充分であつた。そこで、本稿は、伏見作事板の割付・廻漕の過程を解明し、それを軍役の観点から歴史的に位置づけることを、課題としている。

なお、本稿では、諸先学の論考を、次のように略記する。まず、正式な論文の題目・著者名を挙げる。そして、矢印の先は、その論文の略号を指している。

・鎌田永吉『秋田県史 近世上』（秋田県 昭和三九年）の第一章第二節 豊臣政権下の秋田地方
↓ 県史①

・古田良一『日本海海運史の研究』（福井県郷土誌懇談会 昭和四二年）所収 「秋田家文書による文禄・慶長初期北国海運の研究」
↓ 古論文

・山口徹「小浜・敦賀における近世初期豪商の存在形態」（『歴史学研究』第二四八号） 昭和三五年一二月
↓ 徹論文①

・山口徹『日本経済史大系3 近世上』（東京大学出版会 昭和三九年）の第二章 初期豪商の性格
↓ 徹論文②

・山口啓二『日本経済史大系3 近世上』（東京大学出版会 昭和三九年）の第一章 豊臣政権の成立と領主経済の構造
↓ 啓論文

・渡辺信夫『幕藩制確立期の商品流通』（柏書房 昭和四一年）の第一章 豊臣期の流通構造
↓ 渡論文

・塩屋順耳『秋田県林業史』上巻（秋田県 昭和四八年）の第一章 古代・中世の林業
↓ 塩論文①

・塩屋順耳「伏見築城と秋田杉」（『国史談話会雑誌』豊田・石井両先生退官記念号・昭和四八年）
↓ 塩論文②

・長谷川成一「近世初期北奥大名の領知高について」(『日本歴史』四一七号 昭和五八年) →長論文①

・長谷川成一「文禄・慶長期津輕氏の復元的考察」(『津輕藩の基礎的研究』所収 国書刊行会 昭和五九年) →長論文②

一 伏見作事板の關係史料

豊臣政権への杉板の供出は、文禄二年、秀吉の命令を受けた秋田実季が、前田氏建造の「大安宅」一艘分の、杉の大割板(船木)を、秋田から敦賀まで廻漕したときに始まる。⁽³⁾この杉板は、朝鮮戦争の軍需品として求められたのであった。続いて、文禄三年六月十七日、「淀船材木」(三〇艘分)を、秋田氏は求められた。そして、実際に、杉板を廻漕した。同年十月十八日付の実季への朱印状によれば、「河船材木」は、敦賀に無事到着している。⁽⁴⁾また、文禄四年には、秋田氏は橋板八〇〇間(伏見作事用)を、上方へ廻漕した。そして、慶長元年から同四年までは、秋田氏の他、仙北・由利・津輕の「隣郡之衆」(小野寺・本堂・戸沢・六郷・仁賀保・赤宇曾・滝沢・内越・岩屋・津輕氏)も、「秋田実季より杉板を請取り、敦賀まで廻漕すること」を、命ぜられた。慶長元年には、秋田氏と隣郡之衆は、合せて五七二間を廻漕し、慶長二・三・四年には、毎年秋田氏と隣郡之衆は、一〇〇〇間割付けられて、八五〇間ほど廻漕した。文禄三年正月に、伏見築城が諸大名に発令されており、文禄四年から慶長四年までの杉板廻漕は、その普請役の一環であった。

伏見作事板の關係史料は、主に(1)太閤朱印状、(2)御材木入用之帳、(3)伏見作事板請取状、(4)秋田御蔵入米算用状、の四種類に分類できる。本稿では、この四種類の史料を、(1)朱状、(2)材帳、(3)請状、(4)蔵状、と略記する。以下、(1)・(2)・(3)・(4)について簡単に説明する。そして、それぞれについて、細かく番号を付していく(伏見作事板の關係史料は、(1)・(2)・(3)・(4)がすべてではない)。

(1) 太閤朱印状

文禄五年三月二十六日付の朱印状で、秀吉は、由利の仁賀保・赤宇曾・滝沢・内越・岩屋氏に、伏見作事用の橋板三四間を秋田実季より受領し、敦賀へ廻漕することを命じている。慶長二年二月二日付の朱印状では、秋田氏および隣郡之衆に、伏見作事板一〇〇〇間を廻漕することを命じている。慶長三年三月六日付の朱印状では、小野寺義道に、杉大割板一四五間を廻漕することを命じている。次のように、まず、朱印状の日付を挙げる。そして、矢印の先は、その朱印状の略号を指している。⁽⁵⁾

文禄五年三月二十六日	→ 朱状①
慶長二年二月二日	→ 朱状②
慶長三年三月六日	→ 朱状③

(2) 御材木入用之帳

秋田氏の作成にかかる五種類の史料である。例えば、文禄五年十二月三日付のものは、「文禄四年分 於秋田御材木入用之帳」というのが、正式な名称である。次のように、まず御材木入用之帳の日付を挙げる。そして、矢印の先は、その日付の御材木入用之帳の略号を指している。⁽⁶⁾

- 文禄四年十二月十三日 → 材帳①
- 慶長元年十二月三日 → 材帳②
- 慶長二年十月十五日 → 材帳③
- 慶長三年十二月 → 材帳④
- 慶長四年十二月十三日 → 材帳⑤

(3) 伏見作事板請取状

文禄四年と慶長元年の伏見作事板請取状は、敦賀側の請取状である。慶長二・三・四年のものは、商人の請取状（秋田氏分）と隣郡之衆の請取状の二種類がある。文禄四年から年を追って、略号を付けていく。

文禄四年の請取状 端裏書には「文禄四年高橋二郎請取候事」としてある。

これは、秋田氏が、三人の商人（道川兵次郎・塩屋甚右衛門・古川京右衛門）に廻漕させた杉板（橋板）を、敦賀の大谷刑部の家臣高橋二郎兵衛が、八月晦日・八月十三日・九月六日の三度に渡って、敦賀で請取った旨を記している。この請取状は、便宜的に三つに分けることにする。次のように、まず請取った日付を挙げる。そして、矢印の先は、その請取状の略号を指している。

- 文禄四年八月晦日 → 請状①
- 文禄四年八月十三日 → 請状②
- 文禄四年九月六日 → 請状③

慶長元年の請取状 この請取状は、「蜂屋石京進・高橋二郎兵衛橋板請取状写」である。端裏書として、「文禄五年高橋次郎兵衛殿よりの請取のうつけ」とある。この請取状は、文禄五年九月二十一日、慶長二年四月二十日、慶長元年閏九月十日の三度に渡って、秋田氏廻漕分の板を、請取った旨を記している。この請取状も、便宜的に三つに分けることにする。

（8）

略号は次のようにする。

- 文禄五年九月二十一日 → 請状④
- 慶長二年四月二十日 → 請状⑤
- 慶長元年閏九月十日 → 請状⑥

慶長二年の請取状 この請取状には、「慶長貳年御材木隣郡衆へ渡り

申うけ取のあと書」という表書がある。そして、隣郡之衆九人と商人八人（秋田氏分の板を請取った商人）が請取った旨を記している。これも、便宜的に次のように分ける。まず、請取人を挙げる。そして、矢印の先は、その請取状の略号を指している。

- | | |
|---------|-----------|
| 商人 | 隣郡之衆 |
| 五郎兵衛 | 小介河家（孫二郎） |
| 二郎右衛門 | 内越家 |
| 道川三郎左衛門 | 滝沢家 |
| 柴草屋六兵衛 | 岩屋家 |
| 前川五衛門 | 仁賀保家 |
| ↓ 請状②⑨ | 横手家（孫十郎） |
| ↓ 請状①⑩ | ↓ 請状⑪ |
| ↓ 請状⑧ | 本堂家 |
| ↓ 請状⑦ | ↓ 請状⑫ |
| ↓ 請状⑥ | 六郷家 |
| ↓ 請状⑤ | ↓ 請状⑬ |
| ↓ 請状④ | 戸沢家 |
| ↓ 請状③ | ↓ 請状⑭ |
| ↓ 請状② | ↓ 請状⑮ |
| ↓ 請状① | ↓ 請状⑯ |
| ↓ 請状⑩ | ↓ 請状⑰ |
| ↓ 請状⑨ | ↓ 請状⑱ |
| ↓ 請状⑧ | ↓ 請状⑲ |
| ↓ 請状⑦ | ↓ 請状⑲ |
| ↓ 請状⑥ | ↓ 請状⑲ |
| ↓ 請状⑤ | ↓ 請状⑲ |
| ↓ 請状④ | ↓ 請状⑲ |
| ↓ 請状③ | ↓ 請状⑲ |
| ↓ 請状② | ↓ 請状⑲ |
| ↓ 請状① | ↓ 請状⑲ |

- 佐藤助九郎 → 請狀 21
- 高嶋屋二郎左衛門 → 請狀 22
- 酒屋兵衛 → 請狀 23

右に挙げた隣郡之衆の中で、小介河孫二郎とは、赤字曾孫二郎のことであり、横手孫十郎とは、小野寺孫十郎のことである。

慶長三年の請取状 隣郡之衆の請取状は九枚ある。例えば、戸沢氏の場合、「戸沢家奉行伏見作事板請取状」となっている。また、商人の請取状は一二枚ある。しかし、「請取状」という表記はなく、「船積証文」となっている。例えば、「若狭塩屋甚右衛門伏見作事板船積証文」というのが、正式な名称である。こうした船積証文は、意味は請取状と同じである。よって、略号は次のようにする。⁽¹⁰⁾

- 戸沢家 → 請狀 24
- 仁賀保家 → 請狀 25
- 赤字曾家 → 請狀 26
- 岩屋家 → 請狀 27
- 六郷家 → 請狀 28
- 滝沢家 → 請狀 29
- 本堂家 → 請狀 30
- 内越家 → 請狀 31
- 小野寺家 → 請狀 32
- 塩屋甚右衛門 → 請狀 33
- 坂本藤次郎 → 請狀 34
- 白尾長介 → 請狀 35

- 小倉彦四郎 → 請狀 36
- 利右衛門 → 請狀 37
- 河野彦右衛門 → 請狀 38
- 彦十郎 → 請狀 39
- 川左衛門尉 → 請狀 40
- 石井彦五郎 → 請狀 41
- 沢ノ根甚助 → 請狀 42
- 橘屋次郎左衛門 → 請狀 43
- 宮川十右衛門 → 請狀 44

慶長四年の請取状 隣郡之衆の請取状は、九枚ある。商人の場合は、「請

取状」「船積状」「船積帳」の、三種類の表記がなされている。しかし、意味は請取状と同じである。略号は次のようにする。⁽¹¹⁾

- 吉田成忠 → 請狀 45
- 新保ノ新介 → 請狀 46
- 馬借屋孫三 → 請狀 47
- 中川小三郎 → 請狀 48
- 弥兵衛 → 請狀 49
- 溝尻源右衛門 → 請狀 50
- 道川係左衛門 → 請狀 51
- 小野寺家 → 請狀 52
- 内越家 → 請狀 53
- 六郷家 → 請狀 54
- 戸沢家 → 請狀 55

郡	本堂家	↓	請状 56
隣	滝沢家	↓	請状 57
	岩屋家	↓	請状 58
	赤宇曾家	↓	請状 59
	仁賀保家	↓	請状 60

以上の伏見作事板請取状は、すべて杉板の請取状であり、運賃請取状（小野寺氏・本堂氏のみは、秋田氏から運賃を請取った。詳しくは後述。）は、含んでいない。また、伏見作事板積残分証文が、慶長二年には三枚、同三年には二枚、残っている。しかし、これも、伏見作事板請取状の中には、加えていない。

(4) 秋田御蔵入米算用状

これは、秋田氏が、豊臣氏に提出するために作成したものである。次のように、算用状の日付をまず挙げる。そして、矢印の先はその算用状の略号を指している。¹²⁾

文禄四年五月三日	↓	蔵状 ①
慶長二年十一月二十七日	↓	蔵状 ②
慶長三年十二月二十九日	↓	蔵状 ③
慶長九年五月二十五日	↓	蔵状 ④

以上の史料（太閤朱印状・御材木入用之帳・伏見作事板請取状・秋田御蔵入米算用状）は、朱状①と朱状③以外は、すべて秋田家文書である。そして、朱状①は仁賀保家文書であり、朱状③は神戸・小野寺文書である。

二 伏見作事板の寸法と基準板

(1) 蔵米支出の内訳

秋田領内の山で伐採された杉板の内、隣郡之衆に渡したもの以外は、秋田氏が廻漕した。しかし、実際には秋田氏は、敦賀・能登・越前・越中・加賀・近江・出羽・越後・佐渡などの商人に、舟賃として金子を支払い、杉板を廻漕させた。この金子は、秋田氏預りの豊臣氏蔵米を地払いすることによって獲得したものである。なお、隣郡之衆の内で、小野寺氏・本堂氏分の杉板の舟賃だけは、秋田氏預りの豊臣氏蔵米によって賄われた。また、秋田氏は、杉板（秋田氏分と隣郡之衆分すべて）を伐採するために、柚取人を多数雇っている。そして、柚取人の人件費もまた、蔵米によって賄われた。その他、よき・かすがい用の鉄の購入にも、蔵米は支出された。例えば、材帳④によれば、舟賃として蔵米を二二三石八斗五升、柚取人の人件費（柚之飯米）として一二二石六升、よき・かすがい用の鉄の購入費として五六石を、支出している。このように、蔵米支出の内訳は、舟賃が最も多く、次は柚取人の人件費である。そして、鉄の購入費は、支出全体の一〇二%ほどに過ぎないのであった。

(2) 板の単位量

蔵米支出の内訳について、(1)で概略を述べた。ここで、次のような問題を提起する。

【問題①】蔵米支出の基準となる板の単位量は何か。
この問題①を解くに当って、「史料中に板の量が如何なる単位で記述さ

れているか」、ということを見ておく。まず、朱状①・材帳③・請状③・蔵状②の一節を例として、次に挙げることにする。⁽¹⁴⁾

△朱状①▽

一 四間

内越宮少輔

△材帳③▽

一 拾貳間

内越孫太郎ニ渡し申候、

△請状③▽

公儀御板之事

合百四拾五間

但板数五百八拾枚也、

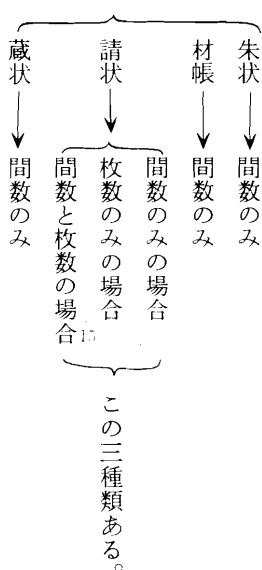
右請取申所実正也、

△蔵状②▽

一 九百貳十九石

伏見御作事ニ御用之板ハ
百五十五間之入用

これらを見ると、請状③は板の量の単位として、「間」数と「枚」数が使われている。しかし、その他は、「間」数のみである。そこで、本稿の第一章で上げた史料を、すべて調べてみると、次のようになる。



右のように、枚数が使われているのは、請状のみである。ここで、「間

数と枚数は、それぞれ何を意味しているのか」という疑問が生ずる。このような疑問が生ずるのだから、「史料中に板の量が如何なる単位で記述されているか」、ということを見ただけでは、問題①を解くことはできないのである。

本章では、以下、伏見作事板について、(3)間数と枚数の比、(4)板の寸法、の順に検討していく。その過程で、先の疑問、即ち「間数と枚数は、それぞれ何を意味しているのか」ということについても言及する。そして、(3)間数と枚数の比、(4)板の寸法、の後に、(5)基準板、において、問題①の検討を行なうことにしたい。

(3) 間数と枚数の比

請状①～⑥の間数と枚数の比をまとめると、表①のようになる。これによれば、ほとんどが、一対四である。そこで、表①の中で、一対四にならないものについて、以下述べていく。

文禄四年 請状①には、「以上 三百八拾枚也」とある。請状②には、「以上 参百六拾枚也」とある。請状③には、「拾枚」とある。この三つを合わせて、合計七五〇枚と計算できる（七五〇枚という記述は、史料中にはない）。そして、請状③の註記には、「文禄四年之御橋板、高橋二郎兵衛よりの請取者七百五十間也、」とある。したがって、七五〇間と七五〇枚であるから、間数と枚数の比は、一対一、である。

ところが、先の請状③の註記には、「此内ニ弍間統之板七十間御座候、是を二つ切ニ仕候而合八百一十間也、」という続きがある。この七〇間は、先に間数と枚数の比が一対一であったから、枚数にすれば、七〇枚となる。そして、この「弍間統之板七十間」を、二つに切るのであるから

表(1) 伏見作事板請取状の間数と枚数の比

年	氏	請 状	間 数	枚 数	間数：枚数	年	氏	請 状	間 数	枚 数	間数：枚数
文 四 年		(1)	間	3 8 0 枚		慶 長 三 年	内	(31)	1 2 間	4 5 枚	1 : 3.75
		(2)		3 6 0			小	(32)	1 4 5	5 8 0	1 : 4
		(3)		1 0			商	(33)	6 3	2 5 2	1 : 4
慶 元 年		(4)	1 6 8.5	6 6 6	1 : 3.95		商	(34)	22.5	9 0	1 : 4
		(5)		4 5			商	(35)	22.5	9 0	1 : 4
		(6)	6.5	2 6	1 : 4		商	(36)	4 5	1 8 0	1 : 4
慶 長 二 年	赤	(7)	3 3	1 3 2	1 : 4		商	(37)	22.5	9 0	1 : 4
	内	(8)	1 2	4 8	1 : 4		商	(38)	4 5	1 8 0	1 : 4
	滝	(9)	2 1	8 4	1 : 4		商	(39)	1 5	6 0	1 : 4
	岩	(10)	6	2 4	1 : 4		商	(40)	45.5	1 8 0	1 : 3.96
	仁	(11)	3 0	1 3 0	1 : 4.33		商	(41)	6 6	2 6 4	1 : 4
	小	(12)		5 8 0			商	(42)	12.5	5 0	1 : 4
	本	(13)	6 6				商	(43)	22.5	9 0	1 : 4
	六	(14)	3 3				商	(44)	4 0	1 6 0	1 : 4
	戸	(15)	35間と 125間	105枚と 500枚	1:3と1:4	慶 長 四 年	商	(45)	3 0	1 2 0	1 : 4
	商	(16)	42.5	1 7 0	1 : 4		商	(46)	42.5	1 7 0	1 : 4
三 年	商	(17)	5 5	2 2 0	1 : 4		商	(47)	42.5	1 7 0	1 : 4
	商	(18)	4 0	1 6 0	1 : 4		商	(48)	62.5	2 5 0	1 : 4
	商	(19)	61.5	2 4 6	1 : 4		商	(49)	2 0	8 0	1 : 4
	商	(20)	5 0	2 0 0	1 : 4		商	(50)	5 0	2 0 0	1 : 4
	商	(21)	2 1	8 4	1 : 4		商	(51)	5 0	2 0 0	1 : 4
	商	(22)	5 0	2 0 0	1 : 4		小	(52)	1 4 5	5 8 0	1 : 4
	商	(23)	3 0	1 2 0	1 : 4		内	(53)	1 2	4 8	1 : 4
	戸	(24)	1 5 0	6 0 0	1 : 4		六	(54)	3 3		
	仁	(25)	3 0	1 2 0	1 : 4		戸	(55)	1 6 0	6 4 0	1 : 4
	赤	(26)	3 3	1 3 2	1 : 4	三 年	本	(56)	6 6	2 6 4	1 : 4
三 年	岩	(27)	6	2 4	1 : 4		滝	(57)	2 1	8 4	1 : 4
	六	(28)	3 3	1 3 2	1 : 4		岩	(58)	6	2 4	1 : 4
	滝	(29)	2 1	8 4	1 : 4		赤	(59)	3 3	1 3 2	1 : 4
	本	(30)	6 6	1 6 4	1 : 4		仁	(60)	3 0	1 2 0	1 : 4

・「氏」の欄の、商は、商人のことであり、赤・内・滝・仁・小・本・六・戸は、それぞれ赤宇曾・内越・滝沢・岩屋・仁賀保・小野寺・六郷、各氏の略称である。

(二間板を一間板にすること)、枚数は一四〇枚となる。したがって、枚数の合計は、七五〇枚―七〇枚―一四〇枚＝八二〇枚、と計算できる(八二〇枚という記述は、史料中にはない)。故に、八二〇間(先の請状③の註記の続きの部分に、八二〇間という記述がある)と八二〇枚であるから、間数と枚数の比は、一対一である。

また、文禄四年においては、請状の総間数は、板を縦に並べたときの、長さの総間数のことである。

慶長元年 請状④には、「合六百六拾六枚者、但六十八間三尺式寸五分之由、」とある。この一六八間三尺式寸五分は、一六八・五間である(詳細は後述)。故に、一対三・九五である。

慶長二年 請状⑪には、「御板三拾間、此板数百三拾枚、」とある。故に、一対四・三三である。また、請状⑮には、「三枚はりの板參拾五間数百五枚、四枚はりの板百式拾五間数五百枚、都合六百五枚、」とある。よって、三枚はりの場合、一対三であり、四枚はりの場合、一対四である。

慶長三年 請状⑯には、「合拾式間但八尺板也、右之板数四拾五まい、」とある。故に、一対三・七五である。また、請状⑳には、「合四拾五間半者但此板数百八拾ナリ」とある。故に、一対三・九六である。

(4) 板の寸法

朱状①には、「長さ三間式尺あつさ四寸杉板」とある。朱状②には、「長さ式間、あつさ五寸 はゝ木ありたけ」・「長さ七尺 あつさ五寸 はゝ木ありたけ」とある。朱状③には、「杉大わり板長さ式間はゝ木有次第あつさ五寸」とある。これらは、伏見作事板の「規格」といえる。

しかし、請状①～⑯を詳細に検討していくと、必ずしも規格通りにはなっていない。それに、右の朱状①・②・③は、伏見作事板の廻漕を命ずる朱印状のすべてではない。また、朱印状の中の規格には、幅については正確な記述はない。しかし、請状①～⑯から、板一枚の幅を知ることができる。このように、実際の伏見作事板一枚の長さ・幅・厚さについて解明するのに、朱状①・②・③の中の規格だけでは不十分なのである。そこで、請状①～⑯を中心に、板一枚の長さ・幅・厚さを、年を追って検討していくことにする。なお、本稿では、「板の寸法」といえば、単に板一枚の「長さ」のことではなく、「長さ+幅+厚さ」を意味するものとする(なお、板の寸法について検討した結果は、表③にまとめてある。また、秋田氏及び隣郡之衆の年間の伐採間数・廻漕間数については、本稿第四章の表⑧に、まとめてある。表③と表⑧を参照のこと。)

文禄四年 板一枚の長さについて、請状①には、六尺六寸・六尺八寸・七尺・七尺二寸とあり、請状③には、六尺八寸とある。そして、請状③の註記は、これらをすべて一間としている。また、その他に、請状①には、板一枚の長さについて、二間二尺五寸・二間二尺三寸とあり、請状②には、二間一尺・二間とある。そして、請状③の註記は、これらをすべて、二間としている。したがって、文禄四年の板一枚の長さは、一間の場合と、二間の場合の二通りある。

次は、板一枚の幅であるが、請状①・②・③によれば、一尺六寸・一尺七寸・一尺八寸・一尺九寸の四通りある。また、板一枚の厚さは、請状①・②・③によれば、四寸・四寸五分・五寸・六寸の四通りある。

なお、古論文(七一九頁)は、文禄四年の板の寸法を、「長さ七尺厚

さ五寸幅一尺八寸」としている。これは、材帳①の、「杣之飯米」のところに、「右之板長さ七尺厚さ五寸は、壹尺八寸、」とあるのを根拠にしていると考えられる。しかし、請状①・②・③の記述の方が、材帳①の一行の記述よりも、情報量は格段に多く、詳細である。したがって、文禄四年の板一枚の長さについては、前者の方が、後者よりも、正確なものである可能性は高い。故に、先の古論文の解釈は、再考を要す。

以上述べたことをまとめると、次のようになる。文禄四年の板一枚の寸法は、長さは、一間あるいは二間、幅は一尺六寸一尺九寸、厚さは四寸六寸である。また、文禄四年の場合、板の総間数（間数の合計、すなわち七五〇間あるいは八二〇間）は、板を縦に並べたときの、長さの合計である（二間板を、板一間と見なせば、板の総間数は、七五〇間となり、二間板を二間板一枚にすれば、板の総間数は、八二〇間となる）。そして、文禄四年の板の枚数（請状①には三八〇枚、請状②には三六〇枚、請状③には一〇枚）は、二間板・一間板を、共に板一枚として計算されている（請状①・③の作者による計算）。

慶長元年 先に見たように、朱状②には、「長さ三間二尺あつさ四寸」という板の規格が示されている。また、材帳②には、板一枚の寸法について、「三間式尺厚さ四寸は、有次第」とある。したがって、材帳②に記述されている板一枚の寸法は、規格通りである。

次に、請状④・⑥における、板一枚の寸法についての記述を、左に列挙する。請状④には、「長さ三間式尺厚四寸也、但六尺五寸間」とある。請状⑤には、板の寸法についての記述はない。請状⑥には、「長さ三間板也、厚三寸、六間半也」とある。

このように、請状④の板は、規格通りである。しかし、請状⑥の板の場合、板一枚の長さは三間であり、規格より二尺短かい。更に厚さは、三寸であるから、規格より一寸だけ薄い。また、請状⑤の板の寸法（長さ・厚さ）は、請状④の板あるいは請状⑥の板の寸法、と同じと考えられる。それでは、請状⑤の板は、いずれであろうか。これは、次のように推定できよう。請状④の板は、六六六枚である。それに対して、請状⑥の板は、二六枚に過ぎない。すなわち、請状④と請状⑥の板の枚数比は、一对二五・六であり、請状④の方が圧倒的に多い。したがって、請状⑤の板の寸法は、請状④の板と同じであった可能性は高い。故に、請状⑤の板一枚は、長さは三間二尺、厚さは四寸と推定できる（推定①）。

また、板一枚の幅については、史料には、直接には記述されていない。しかし、慶長四年の板の寸法について検討した後、推定を行なう。なお、請状④の「六尺五寸間」とは、「六尺五寸で一間」という意味である。以上述べたことをまとめると、次のようになる。慶長元年の板一枚の寸法（秋田氏廻漕分）は、長さは三間二尺あるいは三間、厚さは四寸あるいは三寸、である。なお、隣郡之衆の廻漕した板の寸法は、「長さ三間二尺、厚さ五寸」という、規格の通りであったと考えられる。

慶長二年 朱状②によれば、秋田氏・津輕氏・小野寺氏・戸沢氏に割付けられた板の規格は、「長さ三間 あつさ五寸 は、木ありたけ」である。それに対して、仁賀保氏・赤宇曾氏・滝沢氏・内越氏・岩屋氏・六郷氏・本堂氏に割付けられた板の規格は、「長さ七尺 あつさ五寸 は、木ありたけ」である。このように、朱状②は、板一枚の幅について、正確には規定していない。

また、請状⑦～⑳の、板一枚の寸法についての記述を列挙すれば、次のようになる。請状⑦～⑨・⑪には、「長さ七尺厚五寸也」とある。請状⑩・⑫～⑭には、板一枚の寸法についての記述はない。請状⑮には、「但御板尺式間 厚さ五寸也」とある。請状⑯～㉑には、「長さ二間板也」とある（厚さについての記述はない）。

次に、朱状②と請状⑦～㉑とを比較する。請状⑦～⑨・⑪・⑮の板一枚の長さ・厚さ、及び請状⑯～㉑の、板一枚の長さは、朱状②の板の規格と一致する。したがって、請状⑩・⑫・⑬・⑭の板の長さ・厚さと、請状⑯～㉑の厚さは、規格通りであった可能性は高い。故に、請状⑩・⑫・⑬・⑭の板は、長さはそれぞれ七尺・二間・七尺・七尺、厚さはいずれも五寸、そして、請状⑯～㉑の板の厚さも五寸、と推定できる（推定②）。なお、津軽氏分の板一枚の長さ・厚さは、規格通りと考えられる。

ところが、渡論文（二二・二三頁）・古論文（七一・九頁）・徹論文①（二三頁）・塩論文①（三二頁）・塩論文②（五〇頁）は、慶長二年の板一枚の長さを、すべて二間としている。これらの説は、材帳③の記述を根拠にしていると考えられる。確かに、材帳③の「杣之飯米」ところには、「右之板長さ式間厚さ五寸は、有次第」とある。この記述によれば、慶長二年の板は、すべて二間板ということになる。しかし、朱状②の板の規格についての記述と、請状⑦～㉑の板の寸法についての記述の方が、材帳③の一行の記述より、情報量は格段に多く、内訳も詳細に示されている。したがって、前者の記述の方が、後者の記述より、正確なものである可能性は高い。故に、先の渡論文等の説は、再考を要す。

また、慶長二年の板一枚の幅については、慶長四年の板の寸法につい

て述べた後、検討する。なお、文禄四年には、七尺は一間であった。そのため、慶長二年の七尺板も、一間板と呼ぶことにする。

慶長二年の板の寸法についてまとめると、次のようになる。秋田氏・津軽氏・小野寺氏・戸沢氏分の板は、長さは二間、厚さは五寸である。それに対して、仁賀保氏・赤宇曾氏・滝沢氏・内越氏・岩屋氏・六郷氏・本堂氏分の板は、長さは七尺（一間）、厚さは五寸である。

慶長三年 史料中の、板の寸法に関する記述を列挙すると、次のようになる。請状㉒には記述はない。請状㉓・㉔には、「長さ八尺・あつさ五寸」とある。請状㉕～㉗には、「但八尺板也」とある。請状㉘には記述はない。請状㉙～㉚には、表現に多少の相異はあるが、すべて「長さ七尺間にて式間板也、は、四まいはりにて七尺間也、あつさ五寸」という意味の記述がある。請状㉛には、「一、長さ八尺なり 一、あつさ五寸なり 一、は、四枚はりにて七尺間也」とある。請状㉜・㉝には、「厚さ五寸 長さ式間也」とある。請状㉞には、「長さ七尺間にて式間板也、は、四枚はり也」とある。

まず、慶長三年の板の寸法の内、長さについての検討から始める。先に列挙した請状において、八尺板のものは、すべて隣郡之衆分である。それらは、請状㉕―仁賀保、請状㉖―赤宇曾、請状㉗―岩屋、請状㉘―六郷、請状㉙―滝沢、請状㉚―本堂、請状㉛―内越、という対応関係がある。加えて、慶長三年に八尺板を廻漕した隣郡之衆は、慶長二年に一間板（七尺板）を廻漕した隣郡之衆と合致する。なお、請状㉜も、八尺板となっている。これについても述べておかなければならな

い。請状④が商人石井彦五郎の杉板請取状である、ということとは、先に、本稿の第一章伏見作事板関係史料のところ述べた。そして、請状④（請状④の正式な文書名は、『越後新編ノ石井彦五郎伏見作事板船積証文』である）には、「本堂殿之御板秋田御奉行衆より請取申事 合六拾六間者、但此板数式百六拾四枚也、」とある。この請状④の記述と、請状③とによって、次のように推測できる。まず、本堂氏は、七月十五日（請状③の日付）に、杉板を秋田氏から請取った。しかし、これは名目的な請取に過ぎず、実際には秋田氏が、本堂氏分の杉板を山から舟着場まで搬出した。そして、秋田氏の奉行衆が、八月十三日（請状④の日付）に、本堂氏分の杉板を、本堂氏に雇われた商人石井彦五郎に、渡したのであった。このように、請状③と請状④は、同一の板についての請状なのである。ところが、啓論文（一二二頁）では、秋田氏の回船業者の中に、石井彦五郎を加えている。先の説明により、この啓論文の解釈は成立しない。

これまで、板の寸法の内、長さについて述べてきた。しかし、それは、「八尺」の場合に限られていた。今度は、「二間」という記述のあるものを見ていく。先に列挙した請状の内、二間板という記述のあるのは、すべて秋田氏に雇われた商人の請状である。そして、これらの請状の内容（請取った商人名、請取った杉板の間数）は、材帳④と合致する。したがって、秋田氏は慶長三年に二間板を廻漕したといえる。また、先に列挙した請状の内、板の寸法について記述されていないのは、請状②と請状③の二つだけである。しかし、慶長三年七月三十日付の、「伏見作事板隣郡之衆引渡分寛書」⁽¹⁶⁾（以下『寛書①』と略称）によれば、小野寺

氏は、二間板を廻漕したことになる。すると、戸沢氏分の板が問題となる（津軽氏については、後述）。ここで、慶長二年と比較すれば、慶長二年に一間板を廻漕した大小名（隣郡之衆）は、慶長三年には、八尺板を廻漕していることが分る。そして、慶長二年に、二間板を廻漕したのは、秋田氏・小野寺氏・戸沢氏・津軽氏の四氏である。この四氏の内、秋田氏・小野寺氏が、慶長三年に二間板を廻漕したことは、確かであるから、戸沢氏も、慶長三年に二間板を廻漕した可能性は高い。よって、慶長三年に、戸沢氏は二間板を廻漕した、と推定できる（推定③）。

また、津軽氏に関して、材帳④には、「一百四十五間 津かる手前へ可相渡御朱印御座候処、度々申届候へ共、于今不請取、秋田山中ニ在之、」とある。これは、「秋田氏は津軽氏に杉板一四五間を受渡すことを、朱印状によって命ぜられたが、津軽氏は杉板を請取に來ない。そのため、津軽氏分の杉板は、秋田山中に置いたままになっている。」という意味である。なお、津軽氏分の杉板も、戸沢氏と同様の理由によって、二間板と推定できる（推定④）。それから、先の材帳④の一節の中の、「御朱印」は、どの朱印状のことであろうか。これは、次のように問題②とする。

【問題②】材帳④の、「御朱印」とは、どの朱印状のことなのか。この問題②に関しては、慶長三年の板一枚の厚さについて述べた後に、検討する。

これまで、慶長三年の板の規格の内、板一枚の長さについてのみ、述べてきた。今度は、板一枚の幅について述べる。先に列挙したように、

請状③④には、「なかき七尺間にて式間板也、はゞ四まいはりにて七尺間也(略)」とある。請状④には、「はゞ四枚はりにて七尺間也」とある。請状④には、「長さ七尺間にて式間板也、はゞ四枚はり也」とある。これらの中の「七尺間」とは、七尺で一問、という意味である。すると、次の(一)を導くことができる。

(一)請状③④・④③の板は、幅は四枚で七尺(一問)である。そして、板一枚の幅に換算すれば、一尺七寸五分(1/4問)となる。

また、先の、本章の(1)間数と枚数の比のところで、次の(二)が確認されている。

(二)請状③④・④③(請状④は含まない)の場合、板の間数と枚数の比が、一対四である。

この(一)と(二)は、別々のことではないと考えられる。したがって、(一)と(二)より、次の(三)・④・⑤を導くことができる。

(三)「四枚はりで一問」ということと、「間数と枚数の比が、一対四」ということは、同一である。

(四)「四枚はりで一問」、あるいは「間数と枚数の比が、一対四」ということが、請状において確認された場合、この請状の板一枚の幅は、1/4問である。

(五)「四枚はりで一問」、あるいは「間数と枚数の比が、一対四」ということが、請状において確認された場合、その請状の「板の総間数」は、「板の横幅の総間数」を意味している。

右の(三)・④・⑤によって、本章では、慶長三年の請状②④・③②・④②・④④の板一枚の幅、及び慶長四年・同二年・同元年の板一枚の幅について検討

することになる。しかし、先の(一)と(二)を比較すると、請状④は、(一)には含まれているが、(二)には含まれていないことが分る。というのは、請状④は、間数と枚数の比が、一対三・九六になっているからである。この請状④は、例外的であるが、これはどう考えるべきであろうか。このことが解決されなければ、先の(三)・④・⑤は、確実なものとはいえない。そこで、以下、請状④について検討していく。まず、請状④は、第一章で見たように、川左衛門尉の請状である。ところが、材帳④によれば、秋田氏は、商人川左衛門尉に、板四五間を渡したことになる。それでは、請状④の四五間半と、材帳④の四五間とは、いずれが正しいのであろうか。この問題については、次のように考えられる。表①の請状③⑥・③⑧・④③の記述と、請状③⑥・③⑧・④③に対応する材帳④の記述をまとめると、次の表②のようになる。この表②のように、請状③⑥によれば、商人小倉彦四郎は、秋田氏から、板四五間(一八〇枚)を請取った。また、材帳④によれば、秋田氏は、板四五間(一八〇枚)と、その板を廻漕するための、舟賃としての金子一枚(秋田氏が、蔵米一八〇石を地払いして獲得した金子)を、商人小倉彦四郎に渡した。そして、請状③⑧の場合も、請状③⑥と全く同様である。それに対して、請状④は、四五間半とあり、材帳④の四五間と矛盾している。しかし、板の枚数は、請状④には一八〇枚とあり、材帳④の一八〇枚と一致している。このように、表②において、請状④の四五間半のみが例外的なのである。したがって、表②からすれば、川左衛門尉(請状④)の請取った板は、四五間であった、という可能性は高いといえる。故に、請状④の四五間半という記述より、材帳④の四五間という記述(秋田氏が、川左衛門尉に板

表② 請状③⑥・③⑧・④⑩と材帳④

請 状 の番号	間 数	枚 数	間 数 と 枚数の比	材 帳 ④		
				間 数	蔵 米	金 子
③⑥	4 5 間	1 8 0 枚	1 : 4	4 5 間	1 8 0 石	1 枚
③⑧	4 5	1 8 0	1 : 4	4 5	1 8 0	1
④⑩	45.5	1 8 0	1 : 3.96	4 5	1 8 0	1

四五間を渡したという記述)の方が正しいと推定できる(推定⑤)。この推定⑤より、先の(二)に請状④⑩を加えることができる。請状④⑩が加えられたということは、先の(三)・(四)・(五)の根拠が確かなものになった、ということである。

次に、(三)・(四)・(五)を用いて、請状②④⑥⑧⑩⑫⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の板一枚の幅について検討していく。まず、請状②④⑥⑧⑩⑫⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺は(請状③⑩は含まない)、先に(1)間数と枚数の比のところで確認したように、間数と枚数の比が、一対四である。したがって、(三)・(四)より、請状②④⑥⑧⑩⑫⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺の板は、四枚はりで一問であり、一枚の幅は1/4間である。ところが、請状③⑩は、一二間で四五枚であるから、間数と枚数の比は、一対三七五である。これについては、次の二通り考えられる。

①四五枚は、四八枚の誤りである。

②板一二間の内、三枚はりで一問の板が三間あり、四枚はりで一問の板が九間ある。

①の場合、一二間と四八枚で、間数と枚数の比が、一対四となり、先の(四)より、請状③⑩の板一枚の幅は、1/4間となる。確かに、内越氏分の板は、慶長二年・同四年に、一二間・四八枚となっているから、①の可能性は否定できない。しかし、四五枚を四八枚に修正しなければならぬ、という難点がある。それに対して、②の場合、請状③⑩の数字を修正する必要がない。そして、三枚はりで一問の板は、板一枚の幅が1/3間となり、四枚はりで一問の板は、板一枚の幅が1/4間となる。この「三枚はりで一問」というのは、慶長二年の請状⑤に例がある。したがって、②は不自然ではない。この

ように、①と②を比較すれば、①より②の方が、請状③の数字を、より合理的に説明している。故に、②の方が正しいと推定できる（推定⑥）。なお、津軽氏分の板一枚の幅も、 $1/4$ 間と考えられる。

これまで、慶長三年の板一枚の寸法の内、長さについて述べた。次に、厚さについて検討する。先に、慶長三年の板の寸法についての、請状の記述を列挙した。それによれば、請状②⑤・②⑥・③③・④②・④④の板一枚の厚さは、すべて五寸である。しかし、請状②④・②⑦・③②・④③には、板一枚の厚さについては、記述はない。よって、これらの板一枚の厚さが問題となる。ところで、先の慶長二年の朱状②に記述された、板の規格は二通りあり、そのいずれも、厚さは五寸となっている。このことと、請状②⑤・②⑥・③③・④②・④④の板一枚の厚さが五寸である、ということから、請状②④・②⑦・③②・④③の板一枚の厚さも、五寸であった可能性は高いといえる。故に、請状②④・②⑦・③②・④③の板一枚の厚さは、五寸と推定できる（推定⑦）。なお、津軽氏分の板一枚の厚さも、五寸と考えられる。

先に設定した問題②について、ここで検討していく。問題②の「御朱印」は、次の(a)・(b)の二通り考えられる。

(a) 「御朱印」は、朱状②のことである。

(b) 「御朱印」は、現存してはいないが、慶長三年に、秋田氏に出された朱印状のことである。

まず、(a)の場合から検討する。朱状②には、直接には、慶長二年分の割付けについての記述されている。しかし、(a)の場合、慶長三年の割付けも、朱状②によって行なわれたことになる。したがって、(a)の場合、

慶長二年に秋田氏及び隣郡之衆が廻漕した板（板の間数・板一枚の寸法）と、慶長三年に秋田氏及び隣郡之衆が廻漕した板は、基本的には同じものということになり、先の推定③・④・⑦の正しいことが証明されたことになる。ところが、(a)の場合、次の二つの難点がある。

①慶長二年には七尺板の廻漕があつたが、慶長三年には八尺板となっている。(a)の場合、慶長二年と同三年の板の寸法は同じになるはずであるのに、このような相異が生じている。(a)の場合、この相異を説明できない。

②戸沢氏は、慶長二年には一六〇間廻漕しているが、慶長三年には、材帳④によれば一五〇間となっている（詳細は後述）。(a)の場合、慶長二年と同三年の廻漕は同じになるはずであるのに、このような相異が生じている。(a)の場合、この相異を説明できない。

次に、(b)の場合について検討する。(b)の場合、「現存していないが、慶長三年に、秋田氏に出された朱印状」を仮定することになる。この朱印状を、「朱状④」と呼ぶことにする。ここで、慶長元年の場合と比較することによって、朱状④を仮定することが、不自然か否か、を見てもらう。先に、第一章で述べたように、文禄五年三月二十六日付（文禄五年は慶長元年）の、朱状①が残っている。この朱状①は、由利の五氏、すなわち仁賀保・赤宇曾・滝沢・内越・岩屋の五氏に、伏見作事用の橋板三四間（五氏の割付けられた板の合計が、三四間）を、秋田実季より受領し、敦賀へ廻漕することを命ずる朱印状である。ところが、材帳④によれば、右の由利の五氏の他に、秋田氏・戸沢氏・小野寺氏・本堂氏・津軽氏・六郷氏も、杉板を割付けられている。そして、この戸沢氏・小

野寺氏・本堂氏・六郷氏もまた、秋田実季より杉板を受領して廻漕したのである。この材帳④の記述によれば、「秋田氏が、由利の五氏及び戸沢・小野寺・本堂・津軽・六郷氏に、杉板（由利の五氏はの板の合計は三四間、その他は三一三間であり、合わせて三四七間である）を、受渡して廻漕させ、秋田氏自身も杉板二二五間を廻漕せよ。」という主旨の朱印状が、慶長元年に、秋田氏に出されたと考えられる。したがって、慶長三年も、同元年と同様であると考えれば、慶長三年に朱状④を仮定することは、不自然ではないことになる。また、(b)の場合、慶長三年の板の割付け（割付けは、板の間数に関わることであるが、ここでは特に板一枚の寸法のことを含めることにする）が、慶長二年のそれと一致しなくともよいのであるから、(a)の場合の二つの難点が解消する。ところが、(b)の場合、次の二つの難点が生ずる。

①推定③・④・⑦の正しいことが証明できない（(a)の場合には、証明できた）。

②「朱状④」という、現存していない朱印状を仮定しなければならぬ（朱状④を仮定することが、不自然ではないことは、先に確認したが、やはり難点である）。

このように、(a)・(b)のいずれの場合にも、難点があり、問題②の「御朱印」が、いずれであるか、断定できない。

慶長三年の板の寸法についてまとめると、次のようになる。秋田氏・小野寺氏・津軽氏・戸沢氏分の板は、二間板であり、仁賀保氏・赤宇曾氏・岩屋氏・六郷氏・滝沢氏・本堂氏・内越氏分の板は、八尺板である。また、板一枚の幅は、内越氏分の板以外は、すべて1/4間（一尺七寸

五分）である。それに対して、内越氏分の板二間の内、板一枚の幅が1/3間（二尺三寸三分三厘）のものが三間（九枚）あり、1/4間（二尺七寸五分）のものが九間（三六枚）ある。また、板一枚の厚さは、すべ五寸である。

なお、渡論文（二二・二三頁）・古論文（七一・九頁）・徹論文①（一三頁）・塩論文①（三三頁）・塩論文②（五〇頁）は、慶長三年の板一枚の長さを、すべて二間としている。これらの説は、材帳④の記述を根拠にしていると考えられる。確かに、材帳④の「杣之飯米」のところに、「右之板長さ式間あつさ五寸は、木有次第也、」とある。しかし、請状②④④の記述の方が、材帳④の一行の記述より、情報量は格段に多く、内訳も詳細に示されている。したがって、前者の記述の方が、後者の記述より、正確なものである可能性は高い。故に、先の渡論文等の説は再考を要す。

慶長四年 史料中の、板の寸法に関する記述を列挙すれば、次のようになる。請状④⑤⑤には、「あつさ五寸 長さ式間板」とある。請状⑤⑤には、「八尺板成」とある。請状⑤⑤には、「老間板四枚はり也」とある。請状⑤⑤には、「あつさ五寸、長さ式間、は、四枚はり也」とある。請状⑤⑥には、「あつさ五寸 長さ八尺板にて四枚はり也」とある。請状⑤⑦・⑤⑧には、「八尺板也、但あつさ五寸 は、四枚はりにて六尺五寸間也」とある。請状⑤⑨には、「八尺板也」とある。請状⑥⑥には、板の寸法についての記述はない。

まず、慶長四年の板の寸法の内、長さについての検討から始める。右に列挙した請状の記述より、秋田氏・小野寺氏・戸沢氏が廻漕した

板は、二間板であり、内越氏・本堂氏・滝沢氏・岩屋氏・赤宇曾氏が廻漕したのは、八尺板である。そして、例外的に、六郷氏が廻漕した板は、一間板である。この六郷氏の間板は、内越氏・本堂氏等の八尺板と同等と考えられる。それから、請状の中に、板一枚の長さについての記述がないのは、仁賀保氏（請状⁶⁰）の場合のみである。また、津軽氏の場合、材帳⁵には、「一百四十間 津軽右京山出し不仕候、」とある。これによれば、津軽氏は、慶長四年も、杉板を請取っていない（同二年・三年も請取っていない）。そのため、津軽氏の請状は存在しない。以上によって、板一枚の長さについて、請状によって直接確認できないのは、仁賀保氏と津軽氏分の板である。ところが、慶長三年の板一枚の長さ、慶長四年のそれとを比較すると、大体において類似していることが分る。よって、仁賀保氏・津軽氏分の、板一枚の長さは、それぞれ、八尺・二間と推定できる（推定⁸）。

これまで、慶長四年の板の寸法の内、長さについての検討を行った。今度は、板一枚の幅についての検討する。表^①によれば、請状⁴⁵・⁵³・⁵⁵・⁶⁰には、間数と枚数の比が、一対四である（請状⁵⁴には、枚数の記述がない）。したがって、請状⁴⁵・⁵³・⁵⁵・⁶⁰の板一枚の幅は、 $1/4$ 間である（先に、慶長三年のところで確認した、^四を参照のこと）。また、先に列挙したように、請状⁵⁴・⁵⁸には、「四枚はり」とあり、実は、この請状⁵⁴・⁵⁸の内、請状⁵⁷・⁵⁸には、特に「四枚はりにて六尺五寸間也」とある。この六尺五寸間とは、六尺五寸で一間という意味があるから、請状⁵⁷・⁵⁸の板の幅は、四枚で六尺五寸となる。すると、一枚の幅

が、一尺六寸二分五厘（ $1/4$ 間）となる。それから、請状⁴⁵・⁵³・⁵⁵・⁵⁶・⁵⁹・⁶⁰の板一枚の幅は、先に確認したように、 $1/4$ 間であるが、六尺五寸間という記述がないため、 $1/4$ 間＝一尺六寸二分五厘とは断定できない。しかし、請状⁵⁷・⁵⁸の例からすれば、請状⁴⁵・⁵³・⁵⁵・⁵⁶・⁵⁹・⁶⁰の板一枚の幅は、一尺六寸二分五厘と考えられる。また、請状⁵⁴には、「合三拾三間者 但老間板四枚はり也」とあるだけで、枚数の記述も、六尺五寸間という記述もない。しかし、請状⁵⁴以外のものと同様に、請状⁵⁴の板一枚の幅は、一尺六寸二分五厘（ $1/4$ 間）と考えられる。²⁰なお、津軽氏分の板一枚の幅も、 $1/4$ 間と考えられる。

次に、慶長四年の板一枚の厚さについて検討する。先に列挙したように、請状⁴⁵・⁵²・⁵⁵・⁵⁸には、「あつさ五寸」とあるから、請状⁴⁵・⁵²・⁵⁵・⁵⁸の板一枚の厚さは、五寸である。また、請状⁵³・⁵⁴・⁵⁹・⁶⁰には、厚さについての記述はない。しかし、請状⁴⁵・⁵²・⁵⁵・⁵⁸の板一枚の厚さが五寸であるから、請状⁵³・⁵⁴・⁵⁹・⁶⁰の場合も、五寸であった可能性は高い。故に、請状⁵³・⁵⁴・⁵⁹・⁶⁰の板一枚の厚さは、五寸と推定できる（推定⁹）。なお、津軽氏分の板一枚の厚さも、五寸と考えられる。

ところで、慶長四年の割付けは、どのように決定されたのであろうか。換言すれば、どの朱印状によって割付けられたのであろうか（疑問^②と類似の疑問）。これについて、次の三通り考えられる。

- (a) 朱状^②によって割付けられた。
- (b) 朱状^④によって割付けられた。

(c)現存していないが、慶長四年に、秋田氏に出された朱印状によって割付けられた。

この(a)・(b)・(c)のいずれの場合にも難点²¹があり、(a)・(b)・(c)のいずれが正しいのか、断定できない。

慶長四年の板の寸法についてまとめると、次のようになる。秋田氏・小野寺氏・津軽氏・戸沢氏分の板は、二間板であり、仁賀保氏・赤宇曾氏、岩屋氏・滝沢氏・本堂氏・内越氏分の板は、八尺板である。そして、六郷氏は、例外的に一間板を廻漕しているが、これは八尺板と同じものである。また、板一枚の幅は、すべて $1\frac{1}{4}$ 間（一尺六寸二分五厘）である。板一枚の厚さは、すべて五寸である。

なお、渡論文（二二・二三頁）・古論文（七一・九頁）・徹論文①（一三頁）・塩論文①（三三頁）・塩論文②（五〇頁）では、慶長四年の板を、すべて二間板としている。これらの説は、材帳⑤の記述を根拠にしていると考えられる。確かに、材帳⑤の「杣之飯米」のところに、「右之板長さ式間あつさ五寸、はゞ木有次第、」とある。しかし、請状④⑤⑥の板の寸法についての記述の方が、材帳⑤の一行の記述より、情報量は格段に多く、内訳も詳細に示されている。したがって、前者の記述の方が、後者の記述より、正確なものである可能性は高い。故に、先の渡論文等の説は再考を要す。

これまで、文禄四年から慶長四年までの板一枚の寸法（長さ・幅・厚さ）について検討してきた。しかし、慶長元年と同二年の板一枚の幅については、まだ検討していない。したがって、慶長二年・同元年の順に、

板一枚の幅について、以下検討していくことにする。

慶長二年（板一枚の幅）

表①によれば、請状⑦⑩・⑯⑰⑱は、間数と枚数の比が、一対四である。よって、赤宇曾氏・内越氏・滝沢氏・岩屋氏・秋田氏の廻漕した板は、四枚で幅が一間であり、板一枚の幅は $1\frac{1}{4}$ 間である。また、小野寺氏（請状⑫）・本堂氏（請状⑬）の廻漕した板の幅については、慶長二年八月十七日付の、「秋田実季伏見作事板入用覚」²³（以下『覚書②』と略記）に記述がある。これによれば、小野寺氏・本堂氏の廻漕した板は、「四枚はり」であるから、小野寺氏・仁賀保氏・六郷氏・戸沢氏以外の大小名が、慶長二年に廻漕した板は、一枚の幅が $1\frac{1}{4}$ 間であることが、明らかとなった。以下、六郷氏・仁賀保氏・戸沢氏の順に、板一枚の幅を検討する。

六郷氏（請状⑭）は、慶長三年・同四年に、幅 $1\frac{1}{4}$ 間の板を廻漕しているから、同二年も、 $1\frac{1}{4}$ 間であった可能性は高い。故に、六郷氏が、慶長二年に幅 $1\frac{1}{4}$ 間の板を廻漕したと推定できる（推定⑩）。

次に、仁賀保氏（請状⑮）の廻漕した板の幅について検討する。表①によれば、間数と枚数の比が、一対四・三三である。ところで、仁賀保氏は、慶長三年・同四年の両年に、三〇間で一二〇枚の板を廻漕しており、間数と枚数の比は、一対四である。したがって、請状⑮の三三〇枚という記述は、仁賀保氏側の誤りであり、実際に仁賀保氏が廻漕したのは、慶長三年・四年と同様に、一二〇枚であった可能性が高い（一二〇枚であれば、間数と枚数の比は、一対四）。故に、請状⑮

の一三〇枚は、実際には一二〇枚であった、と推定できる（推定⑪）。この推定⑪に従えば、仁賀保氏が廻漕した板は、一枚の幅が1/4間となる。

次に、戸沢氏（請状⑮）の廻漕した板の幅について検討する。先に、第一章の⑬間数と枚数の比、のところで確認したように、請状⑮には、「三枚はりの板」と「四枚はりの板」という区別がされている。そして、前者の場合、間数と枚数の比が、一对三であり、後者の場合、一对四である。故に、前者の板は、一枚の幅が1/3間であり、後者の板は、一枚の幅が1/4間である。なお、津軽氏分の板一枚の幅も、1/4間と考えられる。

慶長二年の板一枚の幅についてまとめると、次のようになる。²⁶赤宇曾氏・内越氏・滝沢氏・岩屋氏・仁賀保氏・小野寺氏・本堂氏・六郷氏・秋田氏・津軽氏分の板は、すべて一枚の幅が、1/4間である。それに対して、戸沢氏分の板は、一枚の幅が1/4間のものと、1/3間のものがある（1/4間のものが、一二五間、1/3間のものが、三五間）。また、慶長二年の請状⑦・⑮には、「は、四枚はりにて七尺間ナリ」（請状④）・「は、四枚はりにて六尺五寸間也」（請状⑤）、といった記述はない。故に、慶長二年の板の場合、一枚の幅（1/4間）は、正確にはどれだけなのか、分らない（一尺七寸五分・一尺六寸二分五厘、いずれかであろう）。

慶長元年（板一枚の幅） 慶長元年の請状④・⑥は、すべて敦賀側の請取状である。そして、これらは、すべて秋田氏分の板の請取に関するものであり、隣郡之衆の分の板に関する請取状ではない。よって、まず

秋田氏分の板の、板一枚の幅について検討し、その後に、隣郡之衆の分の、板一枚の幅について推定する。

まず、以下の説明に必要な、請状④・⑥、及び材帳②の、板の間数・枚数・寸法についての記述を列挙すると、次のようになる。請状④には、「合六百六拾枚者、但百六十八間三尺式寸五分之由、長さ三間式尺、厚四寸也、但六尺五寸間」とある。請状⑤には、「合四拾四枚」とある。請状⑥には、「合式拾六枚者、但長さ三間板也、厚三寸、六間半也」とある。材帳②には、「板式百廿五間つるかへのほせ申候舟ちんの事、此内百八十六間大谷刑部少輔二渡候、十九間ハふね損申すたり申候、廿間ハ秋田在之」とある。

ここで、渡論文（二四頁）の説の批判を行なう。渡辺氏は、慶長元年の板一枚の幅について、請状④のみを用いて、次のように論じている。請状④に「六尺五寸間」とあることから、一間＝六尺五寸であり、一六八間三尺二寸五分＝一六八・五間である（請状④に、百六十八間三尺二寸五分とある）。そして、六六六枚÷一六八・五＝三・九五枚であるから、一間に含まれる板の枚数は、四枚ちょうどにはならない。このように、四枚ちょうどとならないのは、六六六枚が、敦賀での実質的な請取枚数であるのに対して、一六八・五間が、割付数だから。つまり、廻漕過程の事故等で、板が若干減少したため、四枚ちょうどとはならない、というのである。以上によって、慶長元年の板一間も、板四枚と考えてよいのであり（間数と枚数の比が、一对四）、慶長元年の板一枚の幅は、1/4間である。なお、渡論文（二九頁）には、秋田氏が廻漕した板が、二〇五間となっている。これは、先に列挙した、材帳②の記述を根拠に

しているのである。以上が、渡辺氏の、慶長元年の板一枚の幅についての説の要約である。この説には、次の三つの難点がある。

(1) 六六六枚を、敦賀側の実質的は請取枚数とし、一六八・五間を割付数（秋田氏が、商人に請取した、板の間数）、とするのは、請状④の解釈としては、無理がある。

(2) 請状⑤・⑥の記述を無視している。

(3) 請状④の、一六八間三尺二寸五分と、材帳②の二〇五間あるいは一八六間との関係については、渡辺氏の説からは出てこない。

右の三つの難点があるため、渡辺氏の説が正しいとは、断定しえない。

次に、渡辺氏の説以外の方法で、慶長元年の板一枚の幅について、検討していく。まず、請状⑤の「合四拾五枚」を、四枚はりで一間と仮定して、間数に換算すれば、一一・二五間となる。更に、一間＝六尺五寸とすれば、一一・二五間＝一四六尺六寸二分五厘となる。よって、請状④の一六八間三尺二寸五分と、請状⑤の一四六尺六寸二分五厘と、請状⑥の六間三尺二寸五分（一四六尺四寸とすれば、六間半は、六間三尺二寸五分である。請状⑥の場合、二六枚÷六・五＝三枚であるから、板一枚の幅は、 $1/4$ 間）との合計は、一八六間一尺六寸二分五厘となる。そして、この合計は、材帳②の、秋田氏が太谷刑部に受渡したという一八六間と、極めて近いといえる。この両者、即ち、請状④と⑥の一八六間一尺六寸二分五厘の板と、材帳②の一八六間の板が、同一の板を意味しているとするのが、本稿の仮説の一つである（仮説①）。また、材帳②の記述（二二五間・一八六間といった間数）が、正しいということを前提とし、仮説①を承認すれば、請状④と⑥の一八六間一尺六寸二分五厘の板は、すべて太谷刑部に受渡されたことになる。す

ると、請状④の一六八間三尺二寸五分の板は、一八六間一尺六寸二分五厘の板に含まれているのだから、渡辺氏のいうような割付数ではなく、敦賀側の実質的な請取間数の一部ということになる。換言すれば、請状④における、六六六枚の板と、一六八間三尺二寸五分の板とは、同一の板ということになる。それでは、六六六枚の板、あるいは一六八間三尺二寸五分の板の、板一枚の幅（請状④の板一枚の幅）は、どのように考えればよいのであろうか。先に、渡辺氏の説のところで確認したように、六六六枚÷一六八・五＝三・九五枚となり、板一枚の幅をすべて $1/4$ 間と限らない。しかし、請状⑤と同様に、請状④の板には、板一枚の幅が、 $1/4$ 間のものと、 $1/3$ 間のがあったとすれば、一六八・五間の板の内、一枚の幅が $1/4$ 間の板が一六〇・五間、 $1/3$ 間の板が八間あったと推定できる（推定②）。以上の見解に従えば、慶長元年の、秋田氏分の板について、次のことがいえる。秋田氏は、慶長元年には、二二五間の板を割付けられた。この内、二〇間は、秋田に置いたままにしておき、二〇五間を、商人に敦賀まで廻漕させた。ところが、この二〇五間の内、一九間は舟の事故によって減少し、一八六間（＝一八六間一尺六寸二分五厘）が、敦賀の大谷刑部に渡された。この一八六間（＝一八六間一尺六寸二分五厘）の内、八間は、板一枚の幅が $1/3$ 間（二尺二寸六分七厘）の板であり、他は、すべて、幅 $1/4$ 間（一尺六寸二分五厘）である。

右に上げたのが、慶長元年の板一枚の幅についての、渡辺氏の説に對立する本稿の見解である。しかし、まだ、秋田氏分の板の内、秋田に置いたままになった二〇間、事故によって減少した一九間、更に、秋田氏以外の隣郡之衆の廻漕した板については、板一枚の幅を検討していな

表③ 伏見作事板の寸法

寸法	文 祿 4 年			慶 長 元 年			慶 長 2 年			慶 長 3 年			慶 長 4 年		
	長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚
	間	間	寸	間	間	寸	間	間	寸	間	間	寸	間	間	寸
秋 田 氏	1 と 2	$\frac{1}{4}$	4 ～ 6	3 . (2)	$(\frac{1}{4} \text{ と } \frac{1}{3})$	4 と 3	2	$\frac{1}{4}$	(5)	2	$\frac{1}{4}$	5	2	$\frac{1}{4}$	5
津 輕 氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	(2)	$(\frac{1}{4})$	(5)	(2)	$(\frac{1}{4})$	(5)	(2)	$(\frac{1}{4})$	(5)
小野寺氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	(2)	$(\frac{1}{4})$	(5)	2	$\frac{1}{4}$	(5)	2	$\frac{1}{4}$	5
戸 沢 氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	2	$\frac{1}{4} \text{ と } \frac{1}{3}$	5	(2)	$\frac{1}{4}$	(5)	2	$\frac{1}{4}$	5
							尺			尺			尺		
本 堂 氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	(7)	$(\frac{1}{4})$	(5)	8	$\frac{1}{4}$	(5)	8	$\frac{1}{4}$	5
													間		
六 郷 氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	(7)	$(\frac{1}{4})$	(5)	8	$\frac{1}{4}$	(5)	1	$(\frac{1}{4})$	(5)
													尺		
仁賀保氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	7	$(\frac{1}{4})$	5	8	$\frac{1}{4}$	5	(8)	$\frac{1}{4}$	(5)
赤宇曾氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	7	$\frac{1}{4}$	5	8	$\frac{1}{4}$	5	8	$\frac{1}{4}$	(5)
滝 沢 氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	7	$\frac{1}{4}$	5	8	$\frac{1}{4}$	(5)	8	$\frac{1}{4}$	5
内 越 氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	7	$\frac{1}{4}$	5	8	$(\frac{1}{4} \text{ と } \frac{1}{3})$	(5)	8	$\frac{1}{4}$	(5)
岩 屋 氏				(3 . 2)	$(\frac{1}{4})$	(4)	(7)	$\frac{1}{4}$	(5)	8	$\frac{1}{4}$	(5)	8	$\frac{1}{4}$	5

- ・括弧内の数値は、原則として、推定①～⑬を用いている。但し、慶長元年の秋田氏のところには、3 . (2) となっているが、これは、「3間」の板と「3間2尺」の板があるという意味である。
- ・慶長元年の隣郡之衆分の長さ、厚さ、慶長2年の津輕氏分の長さ、幅と厚さ、慶長3年の津輕氏分の板の幅と厚さ、慶長4年の津輕氏の板の幅と厚さ、慶長4年の六郷氏分の板の幅は、(4)板の寸法のところでは、「～と考えられる。」としてある。表③では、これらにも、括弧をつけた。
- ・文禄4年の板1枚の幅は、厳密には、1尺6寸～1尺9寸である。

い。次に、これらについて見ていく。まず、伏見作事板は、慶長元年・同四年に、大半が四枚はりで一間（板一枚の幅が、 $1/4$ 間）であるから、これらも同様に、四枚はりで一間、即ち板一枚の幅が、 $1/4$ 間と推定できる（推定⁽¹³⁾）。そして、請状⁽⁴⁾によれば、一間 \parallel 六尺五寸であるから、これらも同様に、一間 \parallel 六尺五寸と考えられる。したがって、秋田氏分の二〇間・一九間の板、及び隣郡之衆の廻漕した板は、一枚の幅が $1/4$ 間（二尺六寸二分六厘）となる。

以上によって、文禄四年から慶長四年までの、伏見作事板の寸法（長さ・幅・厚さ）について、すべて検討したことになる。⁽²⁶⁾ それらをまとめると、表⁽³⁾のようになる。

(5) 基準板

先の問題⁽¹⁾について、ここで検討する。まず、諸説の批判を行なう。啓論文（一二〇頁）では、「杉板二間当りの舟賃」を求めている。また、古論文（七二二頁）・徹論文①（一三頁）・徹論文②（一四八・一四九頁）では、「百間当りの伐採費舟賃」を求めている。よって、右の諸説は、いずれも、蔵米支出の基準となる板の単位量を、「板一間」としていると考えられる。しかし、これらの説には、次の二つの難点がある。

①伏見作事板の間数（板一枚の長さのことではない）は、文禄四年には、板を縦に並べたときの長さの合計であるのに対して、慶長元年から同四年には、板を横に並べたときの横幅の合計なのである。⁽²⁹⁾ このように、間数の意味に変化があるから、蔵米支出の基準となる板の単位量を、板一間とすることには、問題がある。

②慶長元年から同四年までは、同じ板一間（四枚はりの板の場合、板

一間の内に、板が四枚含まれる）であっても、その内に含まれる板の、板一枚の長さは、三間二尺・二間・一間の三種類ある。よって、蔵米支出の基準となる板の単位量を、板一間とするのは、問題がある。

右の①・②より、先の諸説が成立する可能性は低い。しかし、まだ完全には否定できない。

次に、問題⁽¹⁾についての、本稿の見解を述べる。表⁽³⁾より、伏見作事板は、寸法によって、大体、次の三種類に分類できる。

①長さ三間二尺・幅 $1/4$ 間・厚さ四寸

②長さ二間・幅 $1/4$ 間・厚さ五寸

③長さ一間・幅 $1/4$ 間・厚さ五寸

右の①・②・③の板の、最大公約数的な板は、③の板である。したがって、問題⁽¹⁾の「蔵米支出の基準となる板の単位量」は③の板一枚である、という予想が立てられる。そして、この③の板を、本稿では以下、「基準板」と呼ぶことにする。しかし、この③の板一枚、即ち基準板一枚が、蔵米支出の基準となる板の単位量である、ということが立証されたわけではない。つまり、これはまだ仮定の段階なのである（この仮定の証明は、本稿第六章で行なう）。なお、渡論文（二四頁）では、蔵米支出の基準となる板の単位量を、「長さ一間の板一枚」としている。これは、本稿の見解と、一見類似しているように見える。しかし、渡辺氏の説には、若干の問題があるため、本稿の見解とは分けて考える必要がある。

註

(1) 『秋田県史 資料古代中世編』の四〇九・四一〇頁(秋田県 昭和三十六年)。以下「県史②」と略記する。

(2) 山口啓二「豊臣政権の構造」(『歴史学研究』二九二号 昭和三年九月)

(3) 県史②の四四七～四四八頁。

(4) 県史②の四六〇頁。なお、淀船三〇艘という数字は、六月十七日付の朱印状には、記述はない。しかし、文禄四年五月三日付の「豊臣氏四奉行連署秋田御藏入米算用状」(県史②の四五九頁)には、「淀船三拾艘分材木」とある。

(5) 朱状①は、『本莊市史 史料編Ⅰ上』(本莊市 昭和五九年三月)の五一四～五一五頁に所収されている。なお、この「本莊市史Ⅰ上」は、以下「市史」と略記する。また、朱状②は、「市史」五二〇～五二二頁に所収。朱状③は、県史②の五一三～五一四頁に所収。

(6) 材帳①は、県史②の四七一～四七二頁に所収。材帳②は、「市史」の五一五～五一九頁に所収。材帳③は、「市史」の五二二～五二五頁に所収。材帳④は、「市史」の五三八～五四一頁に所収。材帳⑤は、「市史」の五五六～五五八頁に所収。

(7) 請状①～③は、県史②の四六三～四六五頁に所収。

(8) 請状④～⑥は、「市史」の五一九～五二〇頁に所収。

(9) 請状⑦～⑮は、「市史」の五二五～五二八頁に所収。請状⑯～⑳は、「市史」の五二八～五三三頁に所収。

(10) 請状㉔～㉚は、「市史」の五四一～五四七頁に所収。請状㉛～㉞

は、「市史」の五四七～五五四頁に所収。

(11) 請状㉟～㊱は、「市史」の五五九～五六三頁に所収。請状㊲～㊴は、「市史」の五六三～五六七頁に所収。

(12) 厳密には、秋田御藏入米算用状には、次の(a)・(b)・(c)の三種類ある。

(a) 秋田氏側の控

(b) 秋田氏が豊臣氏に提出したもの(正文)。

(c) 豊臣氏四奉行の連署の、秋田御藏入米算用状(b)の記述とはほぼ同じであるが、秋田氏宛てとなっている。正文。)

そして、蔵状①は(b)と(c)であり、蔵状②は(a)と(c)であり、蔵状③は(a)であり、蔵状④は(a)である。

また、蔵状①は、県史②の四五八～四六〇頁に所収。蔵状②は、「市史」の五三五～五三七頁に所収。蔵状③は、県史②の五一五頁に所収。蔵状④は、「市史」の六〇二～六〇三頁に所収。

(13) 「単位」というのは、辞書的に、次の二通りの意味がある。

① 数量を計算するとき、基準となる数量の名。

② 物ごとの比較計算のもととなるもの。

そして、「史料中に板の量が如何なる単位で記述されているか」という場合の「単位」は、①の意味である。それに対して、問題①の「蔵米支出の基準となる板の単位量は何か」という場合の「単位」は、②の意味である。

(14) 請状㉟の全文を次に挙げておく。

「小野寺家奉行衆伏見作事板請取状」

公儀御板之事

合百四拾五間 但板数五百八拾枚也、

右請取申所実正也、

慶長三年七月廿一日

小野寺孫十内

本福寺兵庫

道定(花押)

杉沢与八郎 道継(花押)

湊乙兵衛殿

五十目新三郎殿

賀成弥四郎殿

館岡久内殿

参

(15) 間数と枚数が使われている場合は、前掲註(14)の請狀³²と、ほぼ同様の形式で書かれている。前掲註(14)を参照のこと。

(16) 「市史」五四一頁。

(17) 「四枚はりで一間」というのは、板を横に四枚はり合わせて、「一間」になるということであり、「四枚で一間」というのと同じである。

(18) 「七尺間」という記述が、請狀²⁴・³⁰・³²・⁴²・⁴⁴にはないので、この1/4間は、一尺七寸五分とは断定できない。しかし、まず一尺七寸五分と考えてよいであろう。

(19) 塩谷氏は、「秋田県博物館研究報告」(秋田県立博物館 昭和五四年)所収の「由利地方の館」に、「塩論文①の三三三頁の表」を引用しておられる。よって、この表も再考を要するのである。

(20) 請狀²⁴の「四枚はり也」を、「四枚はりで一間」と解釈すれば、

間数と枚数の比が、一対四となり、板一枚の幅が1/4間となる。

(21) 詳細は省略するが、問題②の場合の難点と類似している。

(22) 先に、慶長三年の板の寸法のところで検討した、四を参照のこと。

(23) 「市史」五二一頁～五二三頁。

(24) 前掲註(22)参照。

(25) 八塩論文批判V 塩論文②(五頁)には、請狀¹⁵の「三枚はりの板」・「四枚はりの板」について、次のように述べている。

「一枚の巾最高は一尺九寸であるから、三枚では六尺三寸にならないが、連上枚全体で六尺三寸一間と計算して百六十間になったものであろう。何れにせよ慶長年間から「間」の内容が変わり、従来の長さから巾を基準としても六尺三寸を一間とする方法をとることになった。」

また、塩論文①(三六頁)には、

「三枚ばり、四枚ばりという使い方をしている。従って「間」は余り厳密でない単位であった。」

とある。詳細な批判は省くが、右の塩論文②・①の説は、請狀¹⁵の解釈に無理があり、再考を要す。

(26) 慶長二年の場合、間数は、板を横に並べたときの、横幅の総間数であり(慶長三年の板の寸法のところで検討した(五)を参照)、枚数は、単に板の総枚数である。なお、文禄四年では、間数は板を縦に並べたときの、板の長さの総間数であり、枚数は、単に板の総枚数である(文禄四年の板の寸法のところを参照)。また、慶長三年・同四年では、慶長二年と同様である。以上は、本稿第一章の(2)板の単位量のと

ところで挙げた「疑問」、に対する答えの一部である。

(27) 仮説①の難点は、次の通りである。材帳②の日付は、「文禄五年十二月三日」であるのに対して、請状④は、「文禄五年九月二十一日」、請状⑤は、「慶長二年四月二十日」、請状⑥は、「慶長元年閏九月十日」である。このように、請状⑤は、材帳②より後に出来たものであるから、仮説①には、若干問題がある（材帳②が出来た時点では、請状⑤の板は、敦賀側に渡されていないことになるから）。

また、請状⑤・⑥の板を、材帳②の一九間と考える、という説も可能であるが、本稿では、この説はとらない。

(28) 慶長元年の場合、間数は、板を横に並べたときの、横幅の総間数であり（慶長三年の板の寸法のところで検討した(五)を参照）、枚数は、単に板の総枚数である。この註(28)と前掲註(26)は、本稿第一章の(2)板の単位量のところで挙げた「疑問」に対する答えである。

(29) 前掲註(26)・(28)参照。

(弘前大学人文学部学生)